8 月 27 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　4：　7 – 15

「渇きを癒す方」

中学 1 年生の担任をしていると、クラスの席替えは一大イベントだと気付かされます。誰と、どこに座るかは非常に大事なこと。特に窓際や後ろの方が人気を集めます。「端っこ」には不思議な落ち着きがあるのでしょう。

聖書箇所は、イエスとある女性との対話です。ユダヤ人とサマリヤ人の間には歴史的な遺恨がありました。サマリヤ人である彼女はトラブルを避けるため、人の多く集まる涼しい朝方ではなく、人のいない、暑い昼間に水を汲みに来ます。もう一つ、彼女が人目を避ける理由がありました。それは「夫が 5 人いた」こと。事情は分かりませんが、人から後ろ指をさされるのを避け、様々な意味で社会の「すみっこ」に押しやられていた女性。そんな彼女にイエスは「私に水を飲ませて下さい」と頼まれます。喉が渇いたという「弱さ」を訴えられたのでした。

ところが、最初は彼女に頼んでいたはずのイエスが、いつの間にか「わたしがあなたに永遠のいのちに至る水を与えよう」と言われます。この矛盾したやりとりの中で彼女は気付かされます。自分の方こそ「心の渇き」を抱いていたということを。　端っこで、誰からも相手にされず生きている渇き。自分ではどうしようもできない「弱さ」です。人に知られたくない、秘密にしておきたい……そんな彼女のもがくような「渇き」に、イエスは自分の「弱さ」をさらけ出しながら近付き、彼女の「弱さ」に寄り添い、いのちに至る水を与えて下さるのです。

私たちの日々の居場所は、端っこでも、真ん中でも、今ある「ありのままの場所、それぞれの場所」でいいのだと思います。なぜなら、渇いている弱い自分でも、ありのままのその場所にイエス自身が近付いてきてくれるから。

でもその一方で、そんな自分よりももっと「端っこ」にいざるを得ない友の存在を認められたら。でも、無理に真ん中に引っ張り出すのではありません。イエスが自分に近寄ってくれて癒して下さったように、私たちもその人に近寄り、弱さをさらけ出しつつ共に癒されることを願い、共に歩むことのできる者でありたいと願います。